

体験型海外教育実地研究 第6学年 異文化理解

「Let's write our first name in KATAKANA」

教育学研究科 科学文化教育学専攻 社会認識教育学専修 西 村 祥 太 郎

1 はじめに

私は社会科が専攻だが、「外国語（英語）」の教員免許状を取得している。しかし、英語の授業を教育実習でも経験しておらず、また、授業をできるレベルの英語力を持っているとは思えなかった。特に会話には相当な苦手意識を持っており、現場に出た時に一定レベルの授業ができるか大変不安だった。

大学院入学後、指導教員に体験型海外教育実地研究を勧められた。本科目では、アメリカで現地の子どもに英語を使用して授業を行う。わずかな時間だが、将来英語を教える可能性がある私にとって英語で授業を行うことは、授業スキルの向上を図る上で大変意義深いと考えた。また、授業だけでなく日常的に英語が使用される環境に身を置くことで、少しでも四技能を高めることができればと考え、本科目を履修した。

2 実地研究の日程と概要

月日	曜	交通等	訪問地・用務地	泊
4/26	木	17:30-18:30 C526 渡航までの日程確認, パスポート確認, ESTA・保険の確認, 授業研究テーマの設定方法, 部屋割り確認		
5/18	金	18:00-19:00 C526 授業研究テーマ案の交流		
6/7	木	18:00-19:00 C526 学習指導案の検討		
7/2	月	18:00-19:00 C527 学習指導案(英語版)の検討		
7/7	土	第8回学校間交流国際フォーラム		
7/8	日	9:30-11:00 C527 2012 体験型海外教育実地研究授業研究ワークショップ 学習指導案の検討および教材・教具の作成(渡航のための諸手続き)		
8/2	木	13:30-14:30 C526 保険説明, 学習指導案の検討および提出について		
8/30	木	13:30-15:00 C526 指導案・授業の準備状況確認, 報告書・教材集原稿および発表会について, 渡航関係書類一式配布, 渡航準備, 書類(事務提出書類)提出		
9/11	火	18:00-19:00 C526 直前打ち合わせ		
9/15	土	広島→成田 0745-0925 (NH3112) 成田→ワシントン・ダラス 1105-1040 (NH2) ワシントン・ダラス→ローリー 1245-1347 (NH7144) 空港→City Hotel & Bistro (ウォーレン先生・パーカーさんによる送迎)	アメリカ ノースカロライナ州 City Hotel & Bistro 203 W. Greenville Blvd, Greenville, NC 27834 TEL(877)271-2616 Greenville	
9/16	日	ウォーレン先生による送迎	授業準備 夕食会(学部長先生宅)	同上

9/17	月	ウォーレン先生による 送迎	学校訪問 (Eppes) 夕食会 (レッドフォード 先生宅)	同上
9/18	火	ウォーレン先生による 送迎	学校訪問 (Eppes) 授業実践・観察 ECU 訪問・授業参加 夕食会 (ECU フットボ ール場)	同上
9/19	水	ウォーレン先生・パー カーさんによる送迎	学校訪問	ノースカロライナ州 Sheraton Raleigh 421 S. Salisbury Street Raleigh NC 27601 TEL(919)834-9900 Raleigh
9/20	木	徒歩	学校訪問 博物館見学	同上
9/21	金	ホテル→空港 (タクシー) ローリー→ワシント ン・ダラス 1017-1124 (UA6166) 空港→ホテル (タクシー)	ワシントンへ移動 アメリカ文化体験	Washington Plaza 10 Thomas Circle, N.W. Washington, DC 20005 202.842.1300/800.424.1140 Fax: 202.371.9602 Washington DC
9/22	土		アメリカ文化体験	同上
9/23 9/24	日 月	ホテル→空港 (タクシー) ワシントン・ダラス→成田 1220-1525 (NH1) 成田→広島 1630-1805 (NH3111)		

3 実地研究授業

3.1 単元名

第6学年 異文化理解 「Let' s write our first name in KATAKANA」

3.2 事前準備

我々の生活は様々な外来語で溢れている。特にアメリカをはじめとする英語圏からのものが多数を占めている。一方アメリカでも「sushi」「karaoke」など、日本からの外来語が頻繁に使用されるようになっている。生徒たちにとって、このような社会を把握し、異文化の言語に理解を深めることは大変意義深いことだと考えた。

そのため本単元では、日米それぞれの文化に起源をもつ言葉が各国で使用される言語に変換されて使用される「言葉のグローバル化」を理解させ、実際にカタカナの表を見ながら生徒自

らのネームカードをカタカナで作成することを目標とした。

実践校ではコンピュータ機器が充実しているとの情報を得ていたため、授業全体でパワーポイントを利用することとした。具体的には、かな文字が成立した経緯や日米それぞれに輸入された言葉を紹介する場面を設けた。ここでは地図や絵を使用し、生徒が授業者からの説明だけでなく視覚からも捉えられるように工夫した。次にカタカナで自分の名前を書かせる場面では、直前にアルファベットからカタカナに変換する際の注意点や例を事前に示し、スムーズに活動に取り組めるよう工夫を施した。

3.3 学習指導案

Lesson plan

Lesson Title : "Let's write our first name in Katakana"

Lesson Author : Shotaro Nishimura

Date : September 2012

Grade I would like to teach: 6th grade

Subject: Language

Description:

In this class, students will learn about Japanese character "Katakana". And, they will be able to write their first name in Katakana. And they also will learn about the internationalization of languages.

Objectives: As the result of this activity, students will be able to

1. Understand the internationalization of languages through understanding the history of Katakana
2. Write their first name in Katakana

Materials, resources and Technology:

Table "Development of Kanamoji", "Japanese syllable", Map (Far East and the Pacific)

※Use power point

Procedure

Activity	Teacher's activity	Materials
1. Listen to teacher's introduction.	1. Introduce teacher's name in alphabet, Kanji, Hiragana and Katakana.	Table "Development of Kanamoji" "Japanese syllable" "Map of Far East"
2. Listen to the history of Kanamoji	2. Explain the history of Kanamoji using Map of far east. • Kanamoji developed from Kanji. • Kanji came from China.	
3. Listen to the system of Japanese syllable.	3. Explain the system of Japanese syllable.	

4. Learn about the internationalization of language. 5. Write our first name in Katakana.	4. Explain that we can see many words which were originally Japanese in the US. ・カラオケ→karaoke ・スシ→sushi Explain that we can see many English words written in Katakana in Japan. ・cheese→チーズ ・cookie→クッキー 5. Show example the way to write our first name in Katakana. ・obama→o/ba/ma→オバマ ・simpson→si/m/p/so/n →シンプソン Expain the process ・write our first name ・draw oblique line every 1 or 2 letters ・look for suitable letters which have resemble pronunciation. Help student to write their first name in Katakana. Ask Japanese teachers to help student.	“Map of Pacific”
---	--	-------------------------

3.4 授業の実際

まず簡単なあいさつを行い，日本について知っていることを聞いた。生徒は「富士山」などある程度日本について知っていることが分かった。また，日本地図を利用し，東京や広島的位置を確認させた。ここでは具体的な位置関係を理解させるために，東京から広島までの距離と学校のあるグリーンビルと首都ワシントン D.C との距離を板書した。

次に，授業者の名前を「アルファベット」「漢字」「ひらがな」「カタカナ」で紹介した。ここではひらがなとカタカナは漢字を変形させて作られたものだと説明した。その経緯として，漢字が中国から伝わったこと，形が複雑で利用しづらい漢字を日本でアレンジして生み出したことなど，かな文字の歴史についてパワーポイントを利用して視覚と



聴覚の両方から捉えさせた。

そして、漢字がどのようにかな文字に変化したかを示した表を提示し、授業者の名前の漢字表記とひらがな表記を比較させ、実際に変化したものが使用されていることを把握させた。また、生徒にかな文字の一覧表を配布し一緒に読む活動を行った。



それから、日米それぞれに起源をもつ言葉が外来語として使用されている事例を、「日本から輸出されたもの」と「日本に輸入されたもの」の2つに分けて説明した。それぞれの事例において、「日本ではカタカナでこのように表記・発音されるが、アルファベットではどのように表記されるか」といった発問を行うことで、授業者と生徒のコミュニケーションを図った。

最後に、カタカナで自分の名前を書かせる場面では、完成例や注意点、例（オバマ大統領、アニメ「The Simpsons」のホーマー）を示した上で、先に配布したかな文字一覧表を参考に授業者らの補助を交え、ネームカードを完成させた。

3.5 考察

結論から述べれば、生徒にとって難解な内容に取り組ませるための手立てが不足していたために上手く行かなかった。生徒は初めて見るカタカナを使用して何とか自分の名前を書こうとしていたが、授業者がその取り組みに対して的確な指導を行うことができなかった。その理由として、生徒と円滑なコミュニケーションをとるための英語力の不足や生徒が持つと考えられた疑問を予想し、適切な応答を準備していなかったことが挙げられる。

また、自分の名前を書かせる活動において特定の生徒にかかりきりになり、全体を見通すことができず、全員の進捗状況を把握できずに授業を終えてしまった。これはかな文字の歴史や日米の外来語についての説明に時間がかかり、活動に十分な時間を確保できなかったことが原因として考えられる。この反省は事前に起こりうる問題点を整理しておけば十分に予想できただろう。活動させておいて、最後にプレゼントとして生徒に事前に作成したネームカードを配布するなど事前計画にしておいた方がよりよい授業になったのではないかと考える。

この他にも挙げればきりが無いほど反省点が出てくるであろうが、見たこともない言語で自分の名前を書くという活動に生徒はかなり関心を持ってくれていたのではないかと考える。「分からないから教えてくれ」と質問する生徒は、活動の時間中絶えることはなかった。授業の最後には担任のコールマン先生も活動に取り組まれており、取り扱う題材事態は良かったのではないと言える。それだけに細かい準備を事前に行っておけば、良い結果の伴う授業になったと考えられる。

4 体験型教育実地研究における自己変容

4.1 教育観の変容

「アメリカは自由の国。教育も個々を尊重しているのだろうな。」出国前に抱いていたアメリカの教育に対する私のイメージである。このイメージは、現地の学校に一歩足を踏み入れた時点で打ち崩された。「シャツを入れな



さい」と注意する先生や廊下のいたる所に見られる「Attitude is everything (態度がすべてだ)」などの標語…。むしろ、日本より厳しいくらいの生徒指導が行われていることに大変驚いた。しかし見方を変えれば、このような生徒指導は大人へと成長する生徒にとって世界共通の必要事項だと言える。私は、以前から人格教育が重要だと考えていたが、国を越えて行われていることを知り、ますますその重要性を確信した。

しかし、その一方でアメリカの先生は、生徒が姿勢を改めたり良い行動をしたりした際に必ず誉めていた。日本では「できて当然のことが出来ただけだ」と捉えられるため、このようなシーンを見ることが出来ない。些細な違いに見えるが、私は日本の教師は見習わなければならないと考える。以前読んだ本である教師が「生徒を誉めることを意識すると生徒が生き活きし、結果が伴うようになった」と語っていた。学校評価制度などの導入により結果を求められる学校教育において、誉めることは軽視されがちだが、実は近道なのではないだろうかと考えた。

4.2 自分自身についての変容

10 日間の研修で変容したというよりも、変容しなければならなかったと感じることが多々あった。その中で特に重要だと考えたことは、「学ぶ意欲」である。今回 ECU の大学院の授業に参加する場面があった。そこでは学生と先生による活発な議論が行われていた。また、我々とグループで話し合う場面では、日本の教育についてのさまざまな質問が投げかけられた。たくさんを知りたいと思う気持ちは、これからのどのような将来を迎えても持続させていかなければならないと考える。そして、何のために大学院まで来たのかももう一度考えさせられる機会になった。

4.3 グローバルマインドに関する変容

冒頭で述べた英語の四技能の向上は全くと言っていいほど変化がなかったが、持っている技能でどうにかしようとする姿勢は身についたと考える。文章にできなくても単語を並べたり、ボディーランゲージを交えたりすることで思いが伝わることは意外だった。また、話す相手も私の英語力に合わせて具体例を挙げるなど分かりやすく伝えるなどの工夫をしてくれた。コミュニケーションは「伝える気持ち」が土台であると実感させられた。今回は私が助けられる立場だったが、日本において助ける場面が必ずあると考える。そこでこの経験を活かせればと考える。とは言え、「伝える気持ち」だけでは、本当に伝えたい事や聞きたいことが相手に届かない。日本でも日常的に英語を使用する機会を設け、より高次のコミュニケーションを図るように努力しなければならないと考える。

5 おわりに



このような実り多い研修となったのは、4 月から何度も指導案に関するご指導を下さった GPSC の諸先生方、お忙しい中來日し、現地でも様々なコーディネートをしていただいた現地の諸先生方のおかげである。

特に ECU のウォーレン先生には、ローリー空港からの送迎に始まり、グリーンビル滞在中に感謝しきれないほどのサポートをしていただいた。本当にありがとうございました。